

3 まちの「現状」を知るための調査と分析

■人々が「訪りたい」、「暮らしたい」と思うまちなか

静岡都心がめざす将来像は、「職・住・福・商・学・遊の多様な機能が集積し、歩いて楽しく居心地がよい『おまち』」です。

人々が「訪りたい」、「暮らしたい」と思う場所は、どんな場所でしょうか。それは、オフィスや住宅、教育、福祉、そして魅力的な商業が身近に揃う利便性の高さに加え、家族や友人との会話を楽しんだり、思いがけない素敵な店を見つけてわくわくしたり、地元のおいしい食べ物や伝統文化に触れてまちへの愛着を感じたり、…そんな「心豊かな体験」ができる場所です。この利便性が高く、心豊かな体験ができるまちこそが、私たちが目指す将来像であり、そこで心地よく時間を過ごす人々の姿が、まちの魅力をさらに高めていきます。

■「歩いて楽しく、居心地の良い空間」を連鎖的・面的につなげるまちづくり

まちの全てを一度に大きく変えることはできません。だからこそ、まちを魅力的にするためには、まず「重要な場所」や「まだ十分に価値を発揮できていない場所」に着目することが大切です。それぞれの場所の個性を活かし、「歩いて楽しく、居心地の良い空間」へと少しずつ変えていきながら、そうした空間を面的につなげていくまちづくりが重要です。



馬場川通り（前橋市）

中心市街地のエリア戦略として、前橋市が2019年「前橋市アーバンデザイン」を策定。その先導的事業として、民間主体のまちづくり組織である前橋デザインコミッションが公共工事の資金調達から完成後における管理運営の事務局を担う形で再整備を推進。



花畑広場（熊本市）

熊本城に続く約230mの道路を廃道、広場として隣接する公園敷地をつなぎ、面積約1.5haの一体的な公共デザインを実施。震災復興を象徴する新しいまちのシンボルとして整備を行い、隣接するバスターミナルとも一体的な空間を形成。



ストロイエ（コペンハーゲン/デンマーク）

世界に先駆け、車社会が急速に拡大する1960年代に、都心部を縦断する目抜き通りのストロイエを歩行者専用街路に改造。これを契機に歩行者ネットワークが拡大、アウトドアカフェが定着。自転車施策とあわせて、「人間中心のまちづくり」を推進。

まちづくりを戦略的に進めるには、まず「まちの現状」を知る必要があります。どこに人が集まり、人々がどう歩き回り、活気のもととなる店舗がどこにあるのか。これらをデータで客観的に把握する「調査」と「分析」を行うことで、まちの課題や魅力が明確になり、効果的な「施策」を見つけることができます。

分析で見えてくるまちの場所ごとの特徴と、現状の活動実態とを比べ、魅力や価値を十分発揮できていない「もったいない場所」を抽出し、静岡都心全体の望ましい姿を実現するための戦略の根拠として活用します。

この章では、「これらの調査や分析をどのように行い、何がわかるのか」についてまとめています。

調査・分析の方法とそれぞれの関係

調査、分析の概要とその関係性は以下のようになっています。調査1から3については次のページで目的などを紹介します。

空間特性に関する分析 : 調査1、調査2から作成

まちの「どこに人が集まりやすい」のか
(道路のつながり方から考える) (店舗の立地から考える)

街路のつながりの良さや、沿道の店舗の連続性など、人の歩行、回遊行動などに影響を与える空間の要素を可視化します。



空間の特性は
歩行者の行動
に影響する

歩行者行動に関する分析 : 調査3から作成

歩行者は「どこを通り・どこに立ち寄っている」のか
(実際の人の行動から考える)

実際に、エリア内の人通りの分布や、歩行経路・滞留行動について調査し、可視化します。



改善のための戦略的ポイント（要所）の抽出



まちの空間特性と実際の歩行者行動から、都市空間としての課題や潜在力を整理し、今後の改善・再生の戦略として要所となるポイントを探します。主要な街路以外にも、それらをつなぐ動線や細街路なども対象に、歩行空間や交差点などの改善について検討します。

空間改善・再生の戦略検討へ

静岡都心全体の望ましい姿を実現するためのまちづくりの戦略や、重点的にまちづくりを進めるために、分析結果をエリア別指針の根拠として活用します。

空間の要素・特性や、歩行者の動きや立ちどまりなどの行動を調べるための調査は、まちの現状を知る手掛かりになります。これにより、見えにくかったまちの人通りや、なんとなく感じていたエリアの活気の差などを地図に示し、データに基づいた検討ができるようになります。

指針の策定に向けて新たに実施した3つの調査の概要について以下のとおり整理します。

調査1（空間特性）：通りが「どのようにわかりやすくなっている」のか

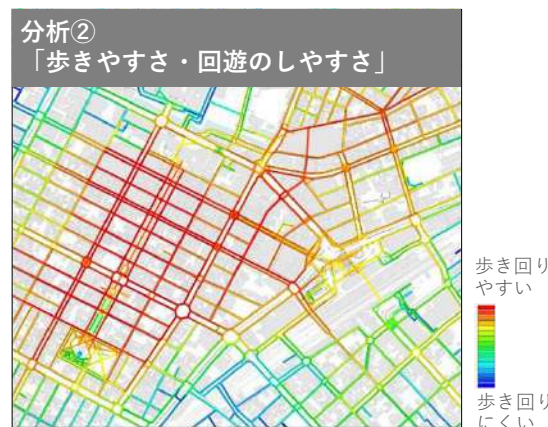
道路網の状況：2024年4月時点

普段歩く通りでも、歩きやすくいつも通る道と、歩きにくく、なんとなく避けてしまう道があります。これは通りのつながりや、見通しの良さ、または曲がり角の角度など、色々な要素が影響しています。こうした**道のつながり、いわばまちの「骨格」を調査し、分析**することで、改善する要素を明確にし、対策をしていくことで、わかりやすく・歩きやすいまちにしていきます。

どんな状況が「良い」と感じるか

皆さんが、はじめて来たまちで目的地に向かう時、「分かりやすい」通りを選ぶのではないのでしょうか。それは、例えば道が広く、視界が遮られておらず、見通しのよい場所のような特徴があると思います。

まちの特性として、見つけやすい、行きやすい、つながりの良い通りを多く持つことは、来街者の自然な回遊を促進する高い潜在力を持っているといえます。その特性を地図上に落とし込むことで、「なんとなく」皆さんが感じている通りの分かりやすさや通りやすさを可視化します。もし、潜在力があっても、魅力を十分発揮できていなければ、その場所につながる道をわかりやすくしたり、途中のお店が途切れのないよう連続性を持たせたりすることで、改善をしていきます。



調査2（空間特性）：まちのどこに「活気のもと」があるか

店舗等の配置：2024年4月時点

人々がまちを歩く「目的」となる店舗や施設、そしてその間口が、まちのどこに、どのように集まっているかを調べます。この調査で特に重要なのが、「店舗の出入口がどこを向いているか」です。例えば、大きなビルでも、裏通り側が壁ばかりでは、その通りに人は集まりません。逆に、小さなお店でも「誰でも入れる出入口」が道路に面して並んでいると、その通りは自然と歩いて楽しい道路になります。

「店舗の出入口」（＝活気のもと）がどこに集中し、どこで途切れているかを知ることが、課題解決のために重要です。



調査3（歩行者行動）：歩行者はまちの「どこを通り・何をしている」のか

調査日：2024年4月19日（金）/20日（土）
9:00～18:30

人々が「どこから来て、どこで立ち止まり、どこへ行くのか、また止まって何をしているのか」という、まちの中の具体的な動きを把握する調査です。調査1、2は「通りのつながりや沿道のつかわれ方を見て」分析するのに対し、この調査は「人々の移動や活動を捉え」分析します。

これにより、「せっかく駅まで来た人が、商店街まで歩いてくれていない」といった課題や、「人々が迷いやすい場所」などを見つけることができます。



まちの「骨格」を専門的に分析すると、静岡都心地区のまちのカタチが生み出す潜在力が見えてきます。この分析は、人々の移動や滞留に影響を与えるまちの隠れたカタチ（骨格）が持つ特性を、色分けしてわかりやすくしたものです。

分析① 「見つけやすさ・わかりやすさ（道の分かりやすさ）」（空間特性）

まちの「中心となる通り」は呉服町通りと七間町通り

- 呉服町通りと七間町通りは、まちの「骨格」上、最もわかりやすい「背骨」であり、分析からも主軸としての特性が高いことがわかります。ただし、呉服町通りと静岡駅を結ぶ実際の経路は地下道が主となるため、歩行者動線が分かりづらい印象があります。
- 両替町通りは、比較的周囲の道路とのつながりが強く、市民の誰もがイメージしやすい主軸としての強い潜在力を持っています。
- 御幸通り（江川町以南）や新静岡駅周辺は、呉服町通りや両替町通りと比較し、中心的な道路がなく、御幸通りを境に東西側とのつながりが「いったん途切れる」印象があります。



分析② 「歩きやすさ・回遊のしやすさ（構造的なつながりの良さ）」（空間特性）

「歩き回れる中心地」は呉服町周辺と新静岡駅の2エリア

- 呉服町通りを中心とする碁盤の目のような道路は、全体として「歩き回りやすい」エリアを形作っています。
- 新静岡駅周辺にも歩行者動線が集まるエリアがあり、この2つの界わいが、まちの歩行者動線網の中心を形成しています。
- これら2つの界わいが一体となっていないのは、本来「つなぐ」役割を担うべき御幸通りの「つなぐ」力が、現状においてはやや弱いからであると言えます。



分析③ 「通り掛かりやすさ（最適な経路としての選ばれやすさ）」（空間特性）

大きな交差点を避けて移動したくなるまちのカタチ（骨格）

- 移動における最短で効率的な経路を分析をすると、静岡駅前や江川町の交差点周辺は、横断歩道が未整備もしくは部分的であり、地下道を利用する方が多いため、地上部は経路として選ばれにくいことがわかります。また、呉服町通りは潜在的に選ばれやすい構造となっている一方で、紺屋町街区は、地下道などにより経路が複数に分散するため、選ばれにくくなっています。
- 御幸通りを横断する道路は、まちの東西を結ぶ重要な通り道ですが、都市構造上の潜在力は低く、横断のしやすさに課題があります。
- 青葉通りは、直進方向よりも横断方向の経路の選ばれやすさの指標が高くなっています。



街路を歩く人にとって、沿道にどんな建物が並んでいるのかは、安心感や快適性、回遊の楽しさなどに大きく影響を与えます。沿道建物の出入口の種類や密度を可視化することによって、沿道の空間特性や、その周囲との関係性について理解することができます。

分析④ 建物全体の「出入口」の分布

(空間特性)

呉服町通りなどにみられる店舗出入口が連続した歩きたくなる沿道

- 呉服町通り及びその周辺の街路では、沿道に連続的に店舗出入口が集積していることがわかります。通りを歩くにつれ、目に入る店舗が途切れることなく変わっていくことが、歩くことが楽しくなることにつながっています。
- 御幸通りや江川町交差点周辺には、事務所や住居も含め建物出入口が少ない箇所が見られます。これは、沿道に比較的規模の大きな施設が多く、建物の出入口が集約されていることが要因と考えられます。

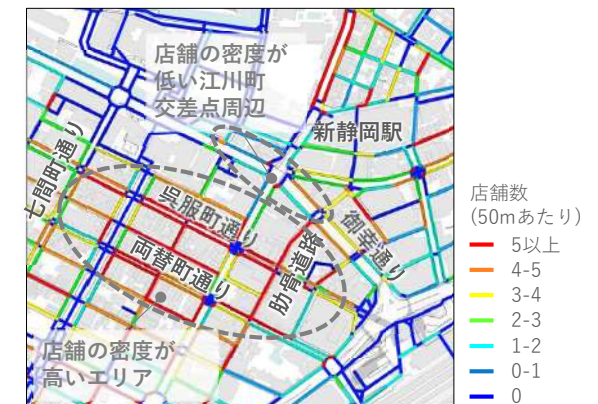


分析⑤ 「店舗の出入口」の密度

(空間特性)

店舗出入口が連続する歩いて楽しい沿道と、それらが途切れる箇所

- 呉服町通り、両替町通りなどの主軸となる街路だけでなく、それらと交差する呉服町と新静岡駅方面を結ぶ街路（いわゆる「肋骨道路」）沿いにも、店舗が密度高く立地しています。
- 江川町交差点周辺において、沿道店舗数が少なくなり、店舗の連続性が途切れる印象を与えます。

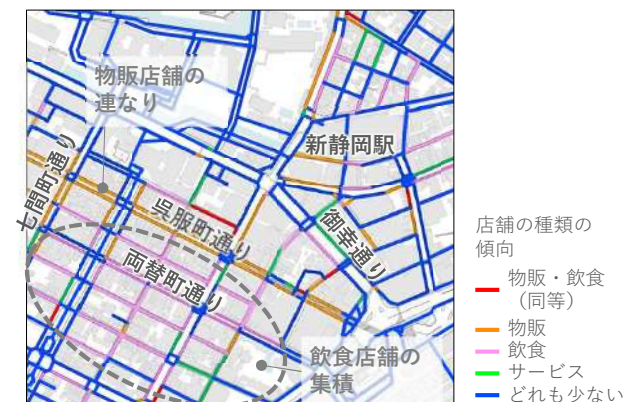


分析⑥ 「店舗の種類」の分布傾向

(空間特性)

物販店舗の線的な連続と、飲食店舗の面的な集積

- 呉服町通りには、物販店舗が密度高く連続しています。
- 飲食店舗は、より広い範囲に面的な広がりを持って分布しており、それぞれが特徴的で個性的なエリアを形成しています。ただし、これら飲食エリア同士のつながりが弱い部分も見られます。



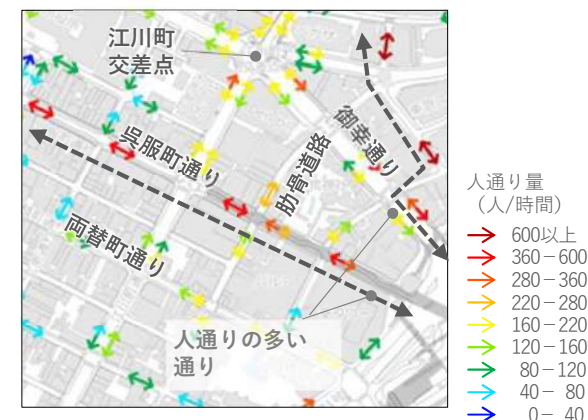
実際の歩行者の行動を調査することで、現在の人々の流動や滞留等の状況を把握します。この調査結果は、空間特性分析の結果と合わせることで、都市デザイン戦略の方向性を定めるうえでの重要な手がかりとなります。

分析⑦ 人通り（通行量）

（歩行者行動）

御幸通り等の「大通り」での人通りの分断

- 実際に人通りが多いのは、静岡駅～新静岡駅の間と、呉服町通りでした。一方で、それらの界わいをつなぐ動線は、御幸通りや江川町交差点で分断されており、比較的人通りが少なくなっています。
- 歩行者量の分布を見ると、細街路である肋骨道路などで一定の人通りが見られる一方で、幅の広い御幸通りにおいてはあまり人通りがない区間もあります。



分析⑧ 歩行経路（移動行動）

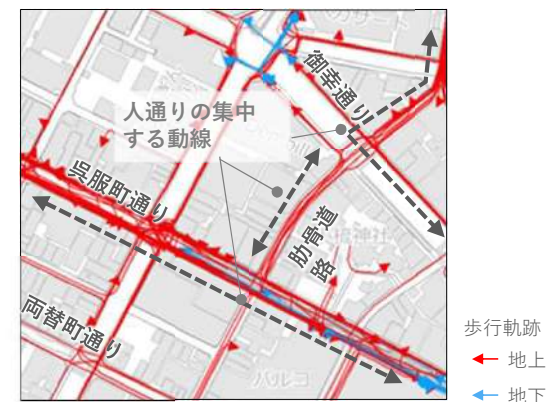
（歩行者行動）

一部の道への人通りの集中

- 歩行軌跡をみると、呉服町通りや静岡駅から新静岡駅への動線に人通りが集中するとともに、肋骨道路にも一定の人通りが見られ、主要動線をつなぐ通りとして機能していることがわかります。しかし、初めて来た人には、その道の役割は分かりにくいものとなっています。

まちのつながりを知るための「結節点」があいまい

- 線的な歩行者動線が明確な一方で、人の動線が交わる「結節点」があいまいなため、まちの構造がつかみにくく、面的な回遊を誘発しづらくなっています。



分析⑨ 立っている・座っている様子（滞留行動）

（歩行者行動）

「広場」より、休憩に利用しやすい「通りのベンチ」

- どこで人が立ち止まっているか見ると、駅前広場などよりも、呉服町通りのベンチなどで休んでいる人の方が多い状況でした。
- 青葉通りなどでは、イベント開催時には多くの立ち止まりや立ち止まる姿が見られる一方で、通常時は立ち止まる人が少なく、日常的に立ち寄りたくなるような魅力や仕掛けが足りない状況です。



改善のための「戦略的ポイント」 (まちを元気にする要所)

ここまでの分析結果を踏まえ、
・歩行者動線の強化や顕在化
・界わい性強化やつながりの向上
により、静岡都心の人の流れを改善し、面的な歩行者の回遊範囲を広げるために、特に重要となるポイント（要所）を以下に示します。

歩行者動線の強化や顕在化

(1) 主軸となる動線の強化

- ① 静岡駅北口駅前
- ② 静岡駅北口地下広場しずチカ

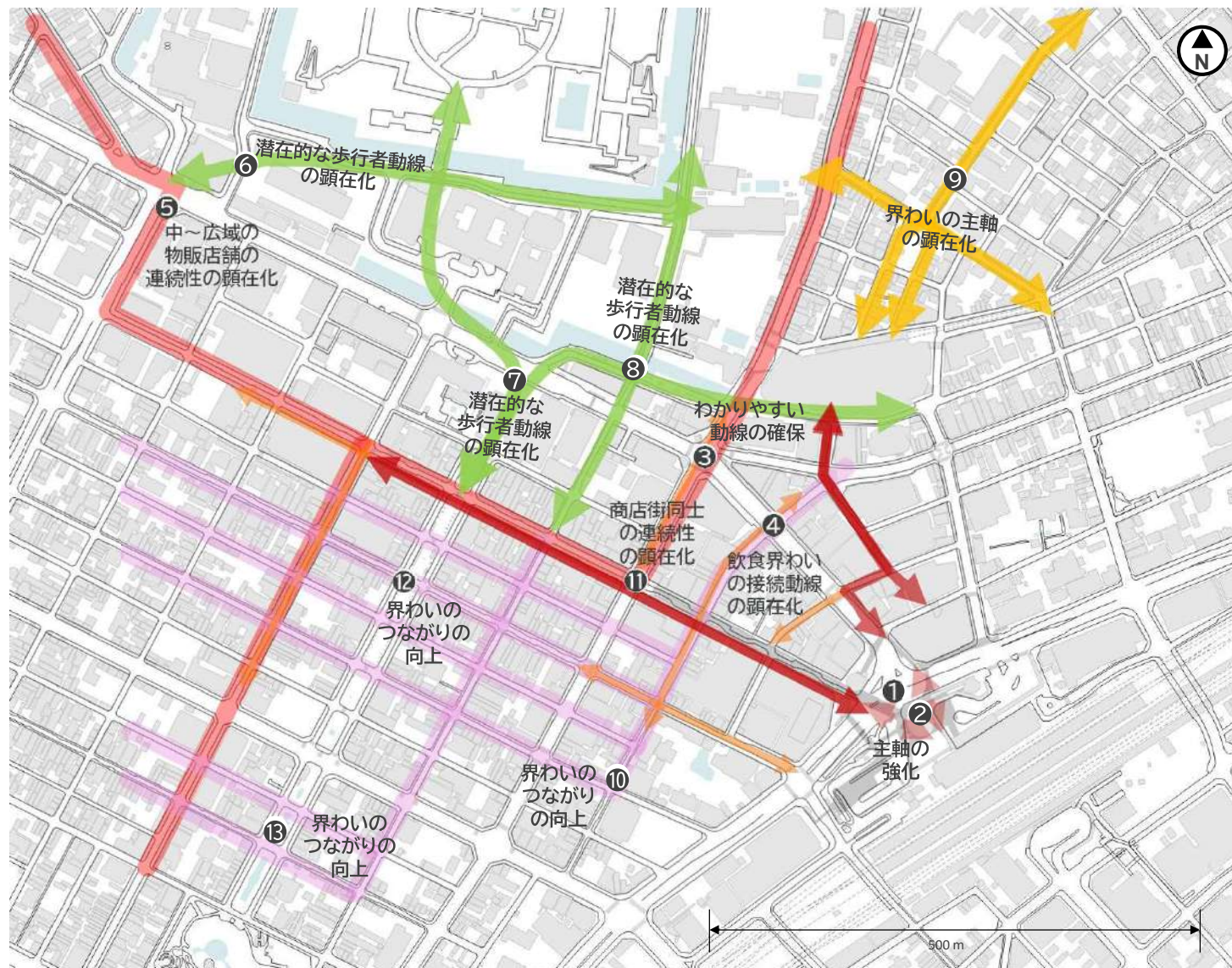
(2) 潜在的な歩行者動線の顕在化

- ③ 江川町交差点
- ④ 肋骨道路（東西方向の細街路）と御幸通りとの交差点
- ⑤ 呉服町通り～浅間通り（中町交差点付近）
- ⑥ 駿府城公園～浅間通り
- ⑦ 青葉通り～駿府城公園、新静岡駅
- ⑧ 玄南通り～駿府城公園
- ⑨ 鷹匠エリア内の主要歩行者動線

界わい性の強化や顕在化

(3) 界わい性の強化やつながりの向上

- ⑩ 飲食が集中する通りの曲がり角
- ⑪ 物販が集中する通りの曲がり角
- ⑫ 飲食が集中する通りの広場空間
- ⑬ 飲食が集中する通りの広場空間



歩行者動線の強化や顕在化

歩行者主軸線の強化

歩行者副動線の強化

新たな歩行者動線の検討

主軸の顕在化・歩行環境向上

界わい性の強化や顕在化

物販店舗の連続性を強化

飲食店舗の連続性を強化

(1) 主軸となる動線の強化

① 静岡駅北口駅前

- 現状は、自動車空間が大部分を占めており、人の動きはバス待ちなど、その場にいないなければならない行動がほとんどとなっています。

方向性：横断歩道の設置が実現すれば、地上部の人通りが飛躍的に増えることが想定されます。これによる多様な滞留行動が生まれることを見据え、歩行者空間の拡大や質の向上など、豊かな空間体験を提供する場への転換が必要です。



② 静岡駅北口地下広場しずチカ

- 駅とまちを結ぶ重要な経路の一部であり、いくつかの経路が交わる結節点となっています。天候に左右されない滞留空間として、一定のニーズがあります。

方向性：移動の起終点となる駅に近い場所であって、比較的短時間を快適に過ごせる質の高い空間整備をしていきます。



(2) 潜在的な歩行者動線の顕在化

③ 江川町交差点

- 新静岡駅直近の五差路の交差点であり、歩行者動線上も非常に重要な場所ですが、現状は地下通路も存在し、煩雑な動線となっています。

方向性：全ての方向を平面で結ぶ横断を実現することで、各界間への接続性を高め、来訪者にもわかりやすい空間構成としていきます。



④ 肋骨道路（東西方向の細街路）と御幸通りとの交差点

- 細い通り（細街路）でありながら、まちの回遊を考える上では重要な経路となっています。今後も、安定的に多くの人通りがあることが見込まれます。

方向性：周辺街区の再開発時には、この人の流れをまちづくりにうまく活かし、商業地の中心的な施設とすることを検討したい場所です。結果として経路がわかりやすくなり、複数の界わいをつなぐ役割が強くなります。



⑤ 呉服町通り～浅間通り（中町交差点付近）

- 中町交差点は平面横断できる箇所が限られ、呉服町通りと浅間通りの両エリア間の分断要素となっています。

方向性：物販店舗の開口部の連続性を高める観点から、特に呉服町通りから本通りを經由して浅間通りへと地上の横断歩道で渡れることを目指し、検討を進めることが望まれます。



⑥ 駿府城公園～浅間通り

- 御幸通りと並行する駿府城公園中堀沿いの動線は、まわりの道とのつながりが少ないです。

方向性：周辺街区の再開発時には、この動線と⑤の交差点を結ぶ歩行者動線の実現の可能性を含め、低層部の配置について周辺に配慮した検討を行うことを方針で示します。



⑦ 青葉通り～駿府城公園、新静岡駅

- 現状、青葉通りはまちの「骨格」としての中心的な役割が低く、通過経路として使われにくくなっています。その一因として、御幸通りとの直接的な接続がないことが理由と考えられます。

方向性：将来的な静岡市役所静岡庁舎の再編等においては、青葉通りと御幸通り、さらには駿府城公園へと直接つながる新たな動線の確保をしていくよう検討します。



⑧ 玄南通り～駿府城公園

- 玄南通りと駿府城公園脇の市民文化会館に至る通りは、ともに比較的長く直線的につながっており、これらが相互に接続できれば、中心的な役割の道になっていくと考えます。

方向性：江川町交差点や中町交差点の改良時には、これらの南北の通りのつながりを視野に入れた、御幸通りの横断箇所について検討します。



⑨ 鷹匠エリア内の主要歩行者動線

- 鷹匠エリアは、街区が小さく回遊しやすい界わいを形成する一方で、歩行者動線の主軸と言える街路がなく、来訪者にはややわかりにくい状況です。

方向性：エリア内の特定の街路を歩行者優先の空間とし、歩きやすさを向上させることで、沿道への魅力的な店舗立地を誘導し、エリアの『顔』となる通りをはっきりさせるようにしていきます。



(3) 界わい性の強化やつながりの向上

⑩ 飲食が集中する通りの曲がり角

- 飲食系の通りがL字型に連続する道の曲がり角にあたる場所であるが、角地が立体駐車場となっており、沿道の連続性が分断されて来訪者に分かりにくいです。

方向性：地面の舗装を連続させ、街区角部の施設の見え方や設えの工夫により、L字のつながりを目で見て分かりやすくすることが必要です。



⑪ 物販が集中する通りの曲がり角

- 呉服町通りの直進に意識が向きやすい場所ですが、北街道方面へのつながりが強化されれば、店舗沿道の連続性を高められます。

方向性：北街道側への動線にも配慮した交差点となるように、また、③～⑪間の沿道には積極的にお店の出入口を設けるよう促していきます。



⑫ 飲食が集中する通りの広場空間

- 両側に飲食が集中する通りがつながり、食事前に待ち合わせをしたり、食事後の余韻を楽しんだりするなど、滞留空間として活かせる可能性があります。

方向性：青葉通りの軸線方向だけでなく、横断方向の動線からの立寄り、また、ゆったりと滞留しやすい空間にしていきます。



⑬ 飲食が集中する通りの広場空間

- 人宿町人情通りとつながり、また玄南通りにも近い場所であり、飲食行動と関連する滞留空間として活かせる可能性があります。

方向性：変わりつつある新たな界わいとの連携を意識し、落ち着いて過ごせる滞留空間とすることを目指します。

